人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）, 1, 38-41.

■　特別寄稿論文

《WITH-nessのおもいでから》

中　野　　清
（人文学部心理人間学科教授）

1 はじめに ―― WITH-ness のおもいで

星野先生とお会いしてから20年近くになる。人間関係科でコスタッフとして一緒に仕事をしてきてさまざまなおもいでがあるが、そのなかでも先生がときおり学生に語っていた人間関係の理念をめぐる 2 つのことばがいまでもわたしの課題として印象づけられている。その 2 つの言葉とは、ひとつは「Inter-dependant な関係」ということばである。人間関係のあるべきすがたは互いに依存しあうだけの Dependant な関係でも、また自分一人だけの Independent なあり方でもなく、両者を総合する Inter-dependant な関係をめざすべきだとするものである。もうひとつのことばは「WITH-ness」というJ. R. ギブのことばである。

I grow when I am in WITH-ness; I contribute to the growth of others when I am deeply with them; ..... (The search for WITH-ness)

ここでギブは「ともにあること」が自己の成長をもたらすとともに、他者の成長をも促すことをうたっている。この自己成長と他者の成長への援助をめざすことが、体験学習方式を用いての人間関係科ならびに人間関係研究センター（以下「センター」）の主要な目標であったことはあらためていうまでもないことだろう。

これからのセンターの基盤と研究課題を検討する一助にと思い、このWITH-nessということばにこめられた原理と課題をすこし考察してみたい。

2 なにが個体か、なにが共生体か

「共生」の問題は現在もっとも関心をむけられる問題の一つであろう。地球環境の問題をはじめ、世界の経済、文化、政治のグローバル化の動き、戦争や民族宗教の対立など、毎日の新聞、ＴＶニュースに必ず登場するテーマである。また、男女差別の問題、社会的弱者への対策、介護保険制度の問題も、貧富の差や能力や機会の差違をもつものどうしがいかに「共生」してゆくかをめぐっての問題であろう。こうした課題を検討し解決の方途をさぐることも大きな課題であるが、問題の具体的検討にはいる前に、そもそも「共生」とはどういうことかを検討しておくこと、つまり原理的な考察をしておくことも必要であると思う。

現在「共生」の問題を見る視野は急速に拡がっている。微視的には遺伝子や細胞のことから巨視的には全宇宙のひろがりにいたるまでを含むさまざまなレヴェルのことが話題にあげられる。

たとえば、人体は約60兆個の細胞から構成されているといわれる。ひとつひとつの細胞はそれとして生命活動の基礎単位となりうるものだから、つまりはこのわたしの体は60兆個の細胞の「共生体」だと見ることもできるわけである。各細胞を独立「個体」と見る遺伝子研究のレヴェルで考えると、人体全体は一個の「個体」というよりは、60兆個の細胞が集合し、ひとつの「共生体」を構成しているということになる。ドーキンスが『利己的遺伝子』において主張した、生物個体は遺伝子の「生存機械」だという見方もさしてあやしむことではないように思える。レヴェルをシフトして、「個」のレヴェルを人間個人におけば、それら人間個人が構成する集合体が「社会」という共生体になり、諸社会を「個」のレヴェルとすれば「世界」が共生体と見なされるという、わたしたちにとってニュースで見慣れた世界がそこに登場する。レヴェルをさらにシフトし、地球の諸生物、諸物体を「個」とし全地球を「共生体」と見なせば、ラブロックのいう「ガイア仮説」の世界が見えてくることになろう。こうした視野は全宇宙空間まで拡げることができるし、現にそうした研究がさかんにおこなわれている。ふたたび遺伝子のレヴェルに話しをもどすと、人体を構成する細胞である真核細胞は、ＤＮＡの主たる格納場所である細胞核とミトコンドリアや色素体など他の細胞小器官からなっているが、ＤＮＡの別種の格納場所でもあるミトコンドリアはいったん真核細胞に進化した細胞にあとから原核生物の細胞が共生したものである、との見方が現在有力視されている。つまり「この私」という個人身体を構成する細胞そのものも38億年にわたる生命進化の歴史のなかで、別種のものどうしの「共生」というかたちでいまを生きているのだといえるだろう。「個人」であるわたしは幾層にも重なった「個」と「共生」のなかで今ここという世界を生きているのである。

3「共生」を見る視座

「共生」すなわち「ともに―いきる」という問題の領域は現在非常に広範囲にわたる問題と位置づけられる。センターが課題対象を人間関係に特化するのは当然であるが、「個」と「共生」をめぐる原理的な問題にも注目してもらいたいと思うので、若干思うところを記しておきたい。

第1は「具体の視座」である。

「ともに―いきる」の「ともに」を考えてみるとき、共（とも）を成立させる構成素である「個」（の意識）がいかにして存立するかの問題がまずある。「一個の人間」がまさにひとりの具体的に生きるひととして価値と尊厳をもつことの根拠がしめされなければ、体験学習の基盤を成立させることにならないのではないだろうか。今ここに個として存立する根拠として、たとえば南山大学哲学科で教えていた桑子敏雄は、『感性の哲学』で個人の「履歴」を敷延し「空間の履歴」という概念をもちいて個と個が生きる世界の独自性を論じているが、これなども参考になるだろう。

第2は「複数の視座」である。

「ともに―いきる」の「共に」である「われわれ」あるいは「仲間」（の意識）がいかにして存立するかの問題である。その際に注意したいのは、同等性を強調する「みんな」という非人称的な集合体のあり方と「われわれ」の違いである。「われわれ」は「われとわれ」が構成する人称的関係性 ――「自」なるわれと「他」なるわれとの関係性 ――「自―他」の差違をふくむ人称的集合体である。自他の差違、異他性をつねにはらむかぎりで、「われわれ」は複数性、つまり多元性を帯びてかたられるものである。

第3は「動詞の視座」である。

「ともに―いきる」の「生きる」ことが時々刻々に具体的に生起する動的な行為であることにも注目したい。生きることそして死ぬことも生命現象の一過程であるが、自動詞として語られることの意味として、それが私たちの内発的な（自己の内からわき起こる）存在のあり様ととらえることができる。その基底的な層としてさきに挙げた細胞の諸活動があげられる。人は生命の進化史そのものを生きつつそれをベースに、人としての意識と感情と思考の精神世界を生きているのである。（この層の問題を見る視点としては、中村桂子『生命誌の世界』が語る「生命誌」というコンセプトに注目してみてもよいだろう。）「生きる―死ぬ」という自動詞的行為のうちに人間の自立性や自由の問題が伏在しているのであるが、人間関係をめぐる種々の問題は人間の他動詞的行為によって個々の課題場面として具体的に展開されてゆく。ここに人と人の間（人間世界）における倫理の問題が主題化してくる。体験学習において注目するプロセスという人間関係に生起する動的な過程についても原理的な問題である倫理問題にもっとふれてゆくべきではないだろうか。

4 のこされた課題 ――「ともにいきる」ために

「ともにあること」、「共生」の問題を見る視点を簡単にのべてみたが、つまるところつぎの問題にいかにこたえてゆくかということであろう。

・そもそも「共に生きる」とはどういうことか？

・なぜ、共に生きてゆくべきなのか？

・ほんとうに私たちは共に生きているのだろうか？

とりわけ最後の問いが私たちにといかけているのは、「愛する」という行為の問いへと連続するもののように思われる。個人ひとりひとりが尊厳をもつ一個の人格として存立し、と同時に個々人の「共生」的な関係が保障される方途が模索されなければならない。センターの活動がなんらかの形で研究教育活動のみならず、実践的活動をも含みもつものとして発展してゆくことをわたしは願っている。これまでこの努力の一環として、人間関係科がおこなってきた学生教職員あげて取り組んできた竹内敏晴先生の『愛の侵略―マザーテレサとシスターたち―』の舞台づくりがあったように思う。この試みが南山大学においても花開くことをねがってやまない。

参考文献

石浦章一、小林秀明、塚谷裕一、2001、『生物の小辞典』、岩波書店

桑子敏雄、2001、『感性の哲学』、日本放送出版協会

竹内敏晴、1993、『愛の侵略－マザーテレサとシスターたち－』、筑摩書房（なお「人間関係科最終版」2000年もある。未出版）

ドーキンス、リチャード、1991、日高敏隆、岸由二、羽田節子、垂水雄二訳『利己的な遺伝子』、紀伊國屋書店

中村桂子、2000、『生命誌の世界』、日本放送出版協会

星野欣生、1984、「With-ness ということ－教師・学生かんけいについて」『人間関係』創刊号p.120f、南山短期大学人間関係研究センター

星野欣生、1996、「ともにあること」『南山』（南山短期大学ブレティン）№33

真木悠介、1993、『自我の起源－愛とエゴイズムの動物社会学－』、岩波書店